

政治への関心「ある」半数超

岡山理科大 大学生の意識調査

琴線に触れる政策を

岡山理科大総合情報学部の木村邦彦教授(マスメディア論)のゼミが参院選公示前後の6月23、24日に、岡山市内6大学の学生480人を対象に実施したアンケートで、51・5%が「政治に関心がある」と答えた。昨年の政権交代直後の調査から1割程度下がっただけ。木村教授は「若者の琴線に触れる政策を打ち出せば関心は高まるのではないか」と話す。

調査は学生の政治意識を探ろうと03年から続け、今回で5回目。岡山大、岡山商科大、山陽学園大、就実大、ノートルダム清心女子大、岡山理科大でアンケートを取った。政治への関心は、政権交代直後の昨年10月の調査で初めて半数を超える52・7%が「ある」と答えた。今回の調査でも半数を超え、選挙権がある約250人中53・9%は「投票に行く」と答えた。

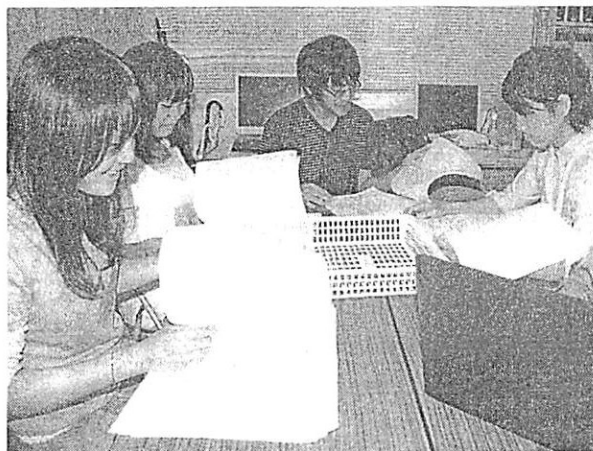
調査を担当したのはゼミの3年生で、昨年の総選挙か今回の参院選が選挙権を得て初めての国政選挙という学生ばかり。選挙について聞くと、政治との距離の遠さを指摘する声が上がった。

ゼミ生の工藤唯さん(20)は「政治家が近いと思えない」と話した。別の学生は「(政治家との接点は)幼いころ、盆踊りに国会議員が来たくらい」と話す。一方で政治に期待する声も切実で、ある学生は「就職も近い。経済を活性化してほしい」と話した。

調査で、投票するときの基準で最多だったのは、候補者の主張(52・6%)で2位の政党(27%)の2倍近く。木村教授は「学生は有権者になりたて。まず候補者の主張を聞いてみたいということなのでは」と分析した。国政選挙では今回の参院選で初めて投票するゼミ生の山崎ひとみさん(20)は「投票は大切。このところ、総理大臣が、いいか悪いか判断する前に辞めてしまうから悩むけれど、考えて投票します」と話した。【井上元宏】

混とんの先に

2010参院選



アンケート結果を分析する学生たち
—北区の岡山理科大で